

昭和廿五年五月二十五日印刷納本
昭和廿五年七月一日發行（毎月一日一回發行）



史學・考古學・地理學

第三十三卷 第三號

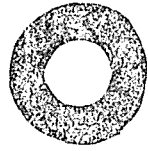
- 東亞に於ける鍔帶金具とその文化的意義 …… 樋 口 隆 康
- 西アフリカに於ける二つの交易形態 …… 岩 田 慶 治
- 古墳時代における文化の傳播（上） …… 小 林 行 雄
- 清代山東省の官制陸上交通路 …… 河 野 通 博

》 學 界 展 望 《 終戰後我が國における人文地理學の動向

書 評 ・ 著 書 論 文 目 録 ・ 彙 報

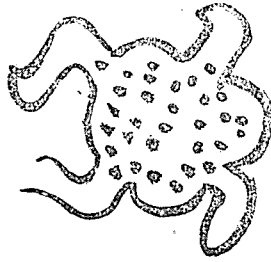
史 学 研 究 會

京都大學文學部東洋史研究室
東洋史研究會
振替口座京都三三七八番



古墳壁畫より「ガマ」を發見

福岡縣浮羽郡福富村西屋形から今年になつて三基の裝飾古墳が發見された。同心圓・楯・靱等の從來のものによく知られた一般的圖文の外に、兩端を上方に反轉させた船上に船頭が擡を持つて立つていたり、船首・船尾の兩所に鳥が停つてゐるような新畫題があつたが、その中最も複雑な構圖をなす珍敷塚メクラシの奥壁々畫中にガマの繪が見出された。四肢を太つた舁軀の兩側に放出した俯瞰的なポーズを横向きに描き、輪郭は朱線を以てし、内に點描でイボを表わしている。そうしてその前に一個の圓がある。これは古く中國の傳説にある月中の蟾蜍センジュをあらわしたものである。淮南子精神訓に「日中に駿鳥（三足鳥）あり、月中に蟾蜍（ガマ）あり」とあるように、月の中にはガマがいたという俗信があつて、三足鳥と共に對をなして日・月の表徴をなすのである。圖文としても漢代武梁祠畫象石・瓦當文・方格規矩四神鏡の背文等に兩者が表現される。圖文としても漢代武梁祠畫象石・瓦當文・方格規矩四神鏡の背文等に兩者が表現されており、高勾麗古墳壁畫では玄室天井の東・西兩壁に、圓の中に入つた二者が描かれていて、珍敷塚のポーズはこの高勾麗壁畫のものに全く一致するのである。從來九州壁畫古墳は高勾麗との關係が色々と言われていたが、後者の畫題は四神圖や狩獵饗宴等の日常生活圖を主とし、中國的影響をうけたものであることが明瞭なのに對し、前者九州の場合には直弧文・同心圓・三角形・双脚輪文等我國特有の裝飾圖文が多く、兩者の關係を示す具體的資料を欠いていたし、一方舟の繪等からして南方との關係を力説するものもあつたが、今回のガマの發見によつて高勾麗壁畫ひいては中國のそれとの密接な關係を明かにしたといつてもいゝであらう。



史学研究会役員

理事 長 (編纂主任) 佐伯 實 (庶務主任) 柴田 實 (會計主任) 評議 員 (編纂) 田村 秀 (編纂) 井上 智 (編纂) 海原 末 (編纂) 小笠原 宣 (編纂) 織田 武雄 (編纂) 貝田 茂樹 (編纂) 柴村 實造 (編纂) 那波 利貞 (編纂) 原直 幹 (編纂) 藤野 彰二 (編纂) 三品 清一 (編纂) 水野 市定 (編纂) 宮田 數之亮 (編纂) 村上 俊 (編纂) 野田 輝 (編纂) 星田 圭四郎 (編纂) 門脇 禎二 (編纂) 佐藤 圭四郎 (編纂) 里井 彦七 (編纂) 岸井 隆康 (編纂) 樋口 一朗 (編纂) 水津 一朗 (編纂)

原 佐伯 實 柴田 實 田村 秀 井上 智 海原 末 小笠原 宣 織田 武雄 貝田 茂樹 柴村 實造 那波 利貞 原直 幹 藤野 彰二 三品 清一 水野 市定 宮田 數之亮 村上 俊 野田 輝 星田 圭四郎 門脇 禎二 佐藤 圭四郎 里井 彦七 岸井 隆康 樋口 一朗 水津 一朗

編輯後記

前號に引續いてテーマ中心の編纂で、今回は考古學と人文地理の特輯としました。文化の時間的空間的兩方面からの研討は自ら文化圏や文化交流等の問題に焦點が合わされるに至つたのも、最近の學界の方向や關心の中心を暗示するようにも思われて編者としては面白い體驗を得た次第です。執筆者はいすれも京大關係者ばかりですが、新人の多い所に本會再出發の意氣を御感得願へると思ひます。今後は他の地方の方々の玉稿もいたゞいて、史學研究會本來の姿を史林にも反映させたいと念願する次第です。

(樋口記)

刷行 日 五月廿一日
發行 日 六月廿七日
一九五〇年

史林

定價 八拾圓

編輯

史学研究会

發行人

岸本貞三郎

印刷所

天業社印刷所

發行所

大阪市東區南新町一ノ六
教育タイムス社出版部
振替大阪七一九二〇

代表者 出間照久

京都市左京吉田本町
京都大學文學部内

代表者 佐伯富

大阪市都島區野田町三四

